

# 母親からみた 小児科受診時の 乳幼児の啼泣状況

藤原千恵子 永井利三郎 藤井恵

(大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻)

日野利治 藤田 位 絹巻 宏 山入高志

(近畿外来小児科学研究グループ)

# I. 研究目的

小児科外来を受診する乳幼児は、不安や恐怖心から痛みを伴わない診察場面でも啼泣することがある。乳幼児の啼泣は、母親の不安や診察の困難をもたらすといわれている。

本研究は、小児外来を受診した6歳未満の乳幼児が痛みを伴わない診察において、どのような場面でどの程度啼泣していると母親が認識しているかを明らかにする。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 対象

近畿圏下の4カ所の小児科医院を受診し痛みを伴わない診察を受けた6歳未満の乳幼児の母親400名

### 2. 調査期間: 2004年5月

### 3. 調査方法

診察終了後、母親に研究メンバーから研究の趣旨や倫理的配慮について明記された文書を添えて、質問紙と返信用封筒を配付し、自宅で記載後、郵送によって回収する方法で行った。

## 4. 調査内容

- ①対象の属性(乳幼児の年齢、きょうだい数)
- ②医院での受診体験(過去の受診経験、受診時の症状、これまでの受診時啼泣状況、痛みを伴う医療体験の有無)
- ③調査時の診察前後場面における乳幼児の啼泣状況  
(「ずっと泣いている(4点)」から「泣いていない(1点)」までの4分類)

## 5. 分析方法

データは、SPSSver12を使用し単純集計し、 $\chi^2$ 検定を行った。

## 6. 倫理的配慮

本研究は、大学の倫理委員会の承認を得て行った

# Ⅲ. 結果

## 1. 対象の属性

208名 (回答率52.0%)

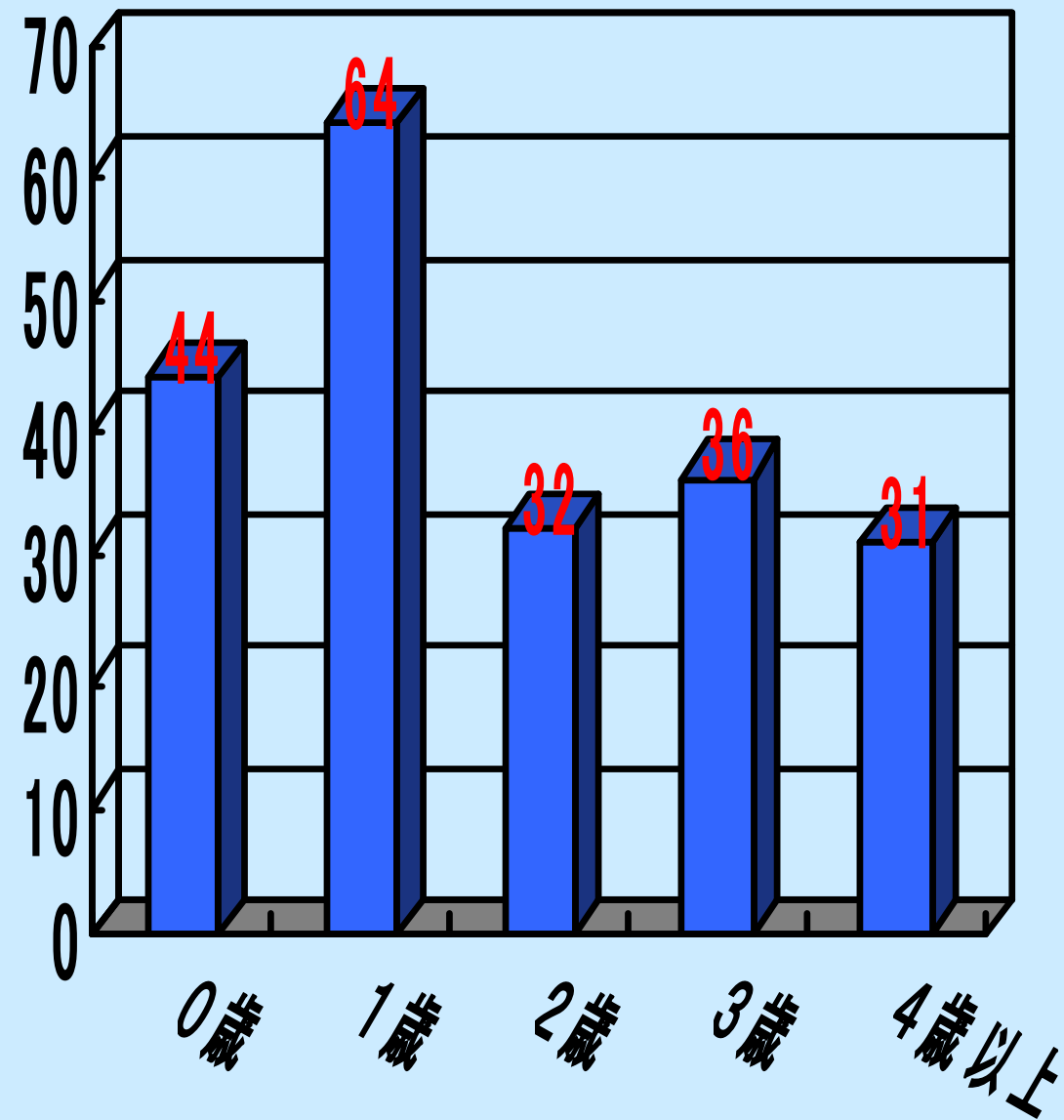


図1 乳幼児の年齢

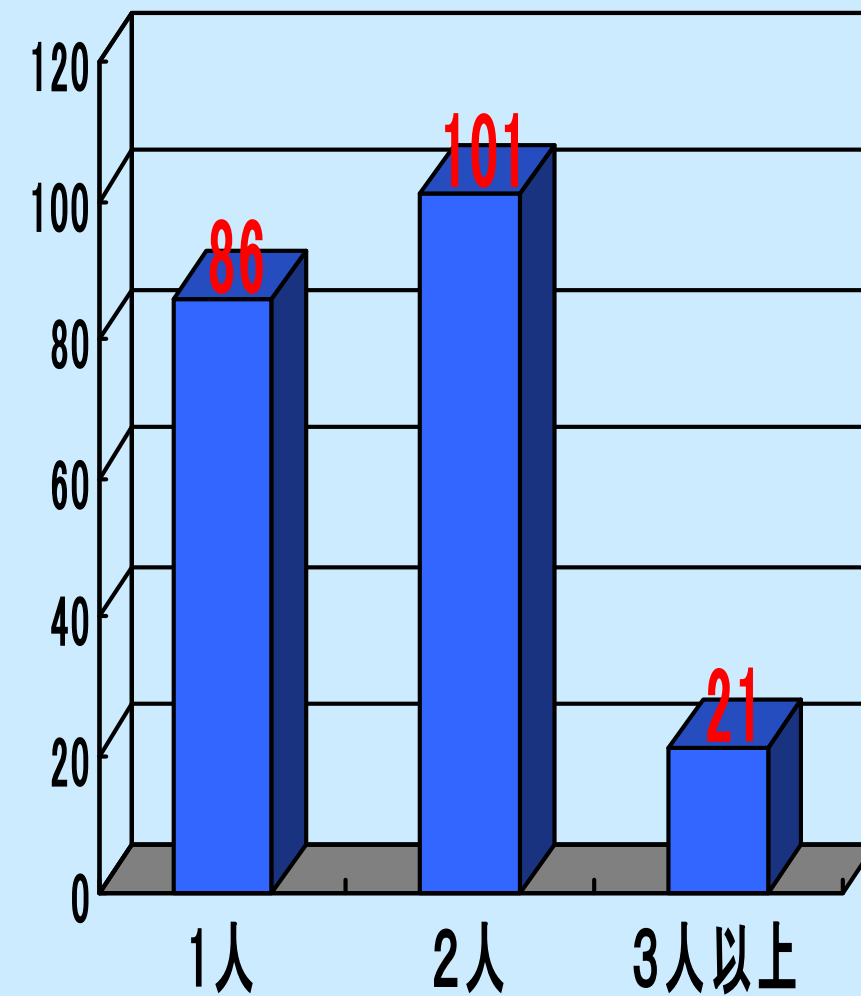
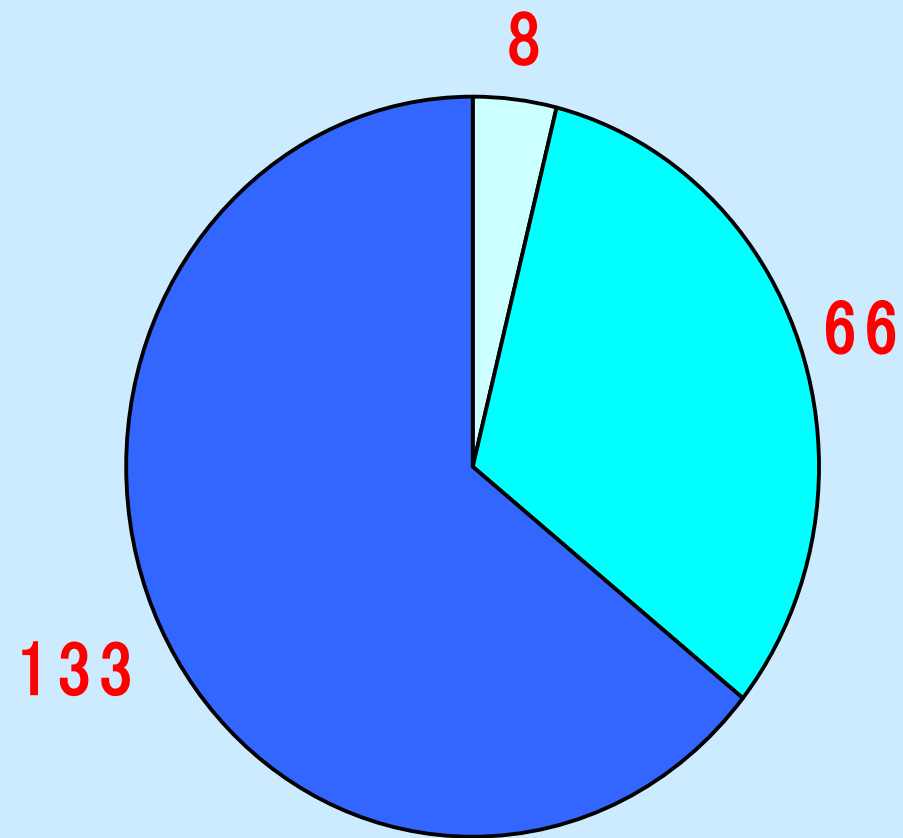


図2 きょうだい数

## 2. 受診状況



□ 初めて □ 時々受診 □ よく受診

図3 医院への受診状況

表1 受診時の主な病状

症 状	人数(%)
風邪症状	129(62.0)
喘息・アレルギー	22(10.6)
消化器症状	19(9.1 )
皮膚症状	18(8.7 )
水痘・風疹等	7(3.4 )
溶連菌感染	4(1.9 )
その他	5(2.4 )

### 3. 受診時のこれまでの啼泣状況と痛みを伴う医療体験の有無

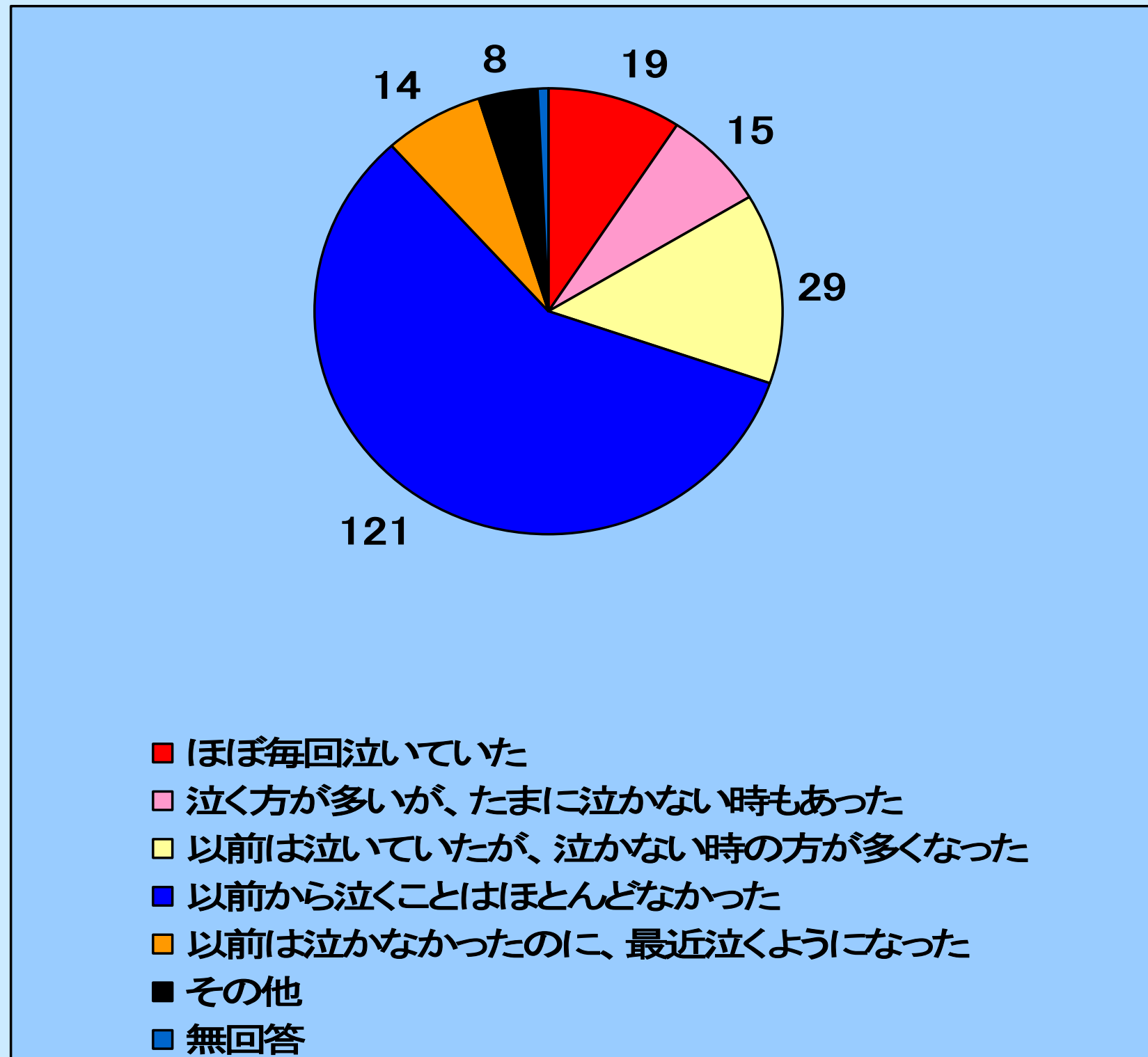


図4 受診時のこれまでの啼泣状況

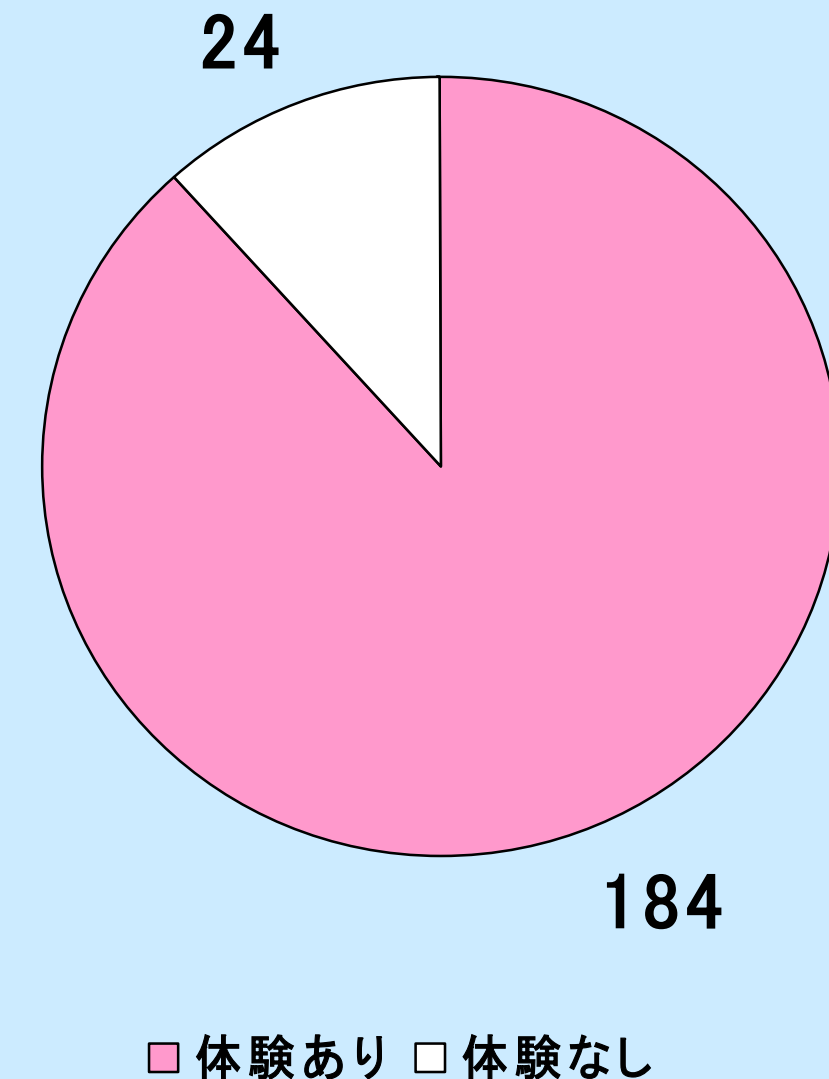


図5 痛みを伴う医療体験の有無

# 4. 調査時の診察室での各場面における啼泣状況

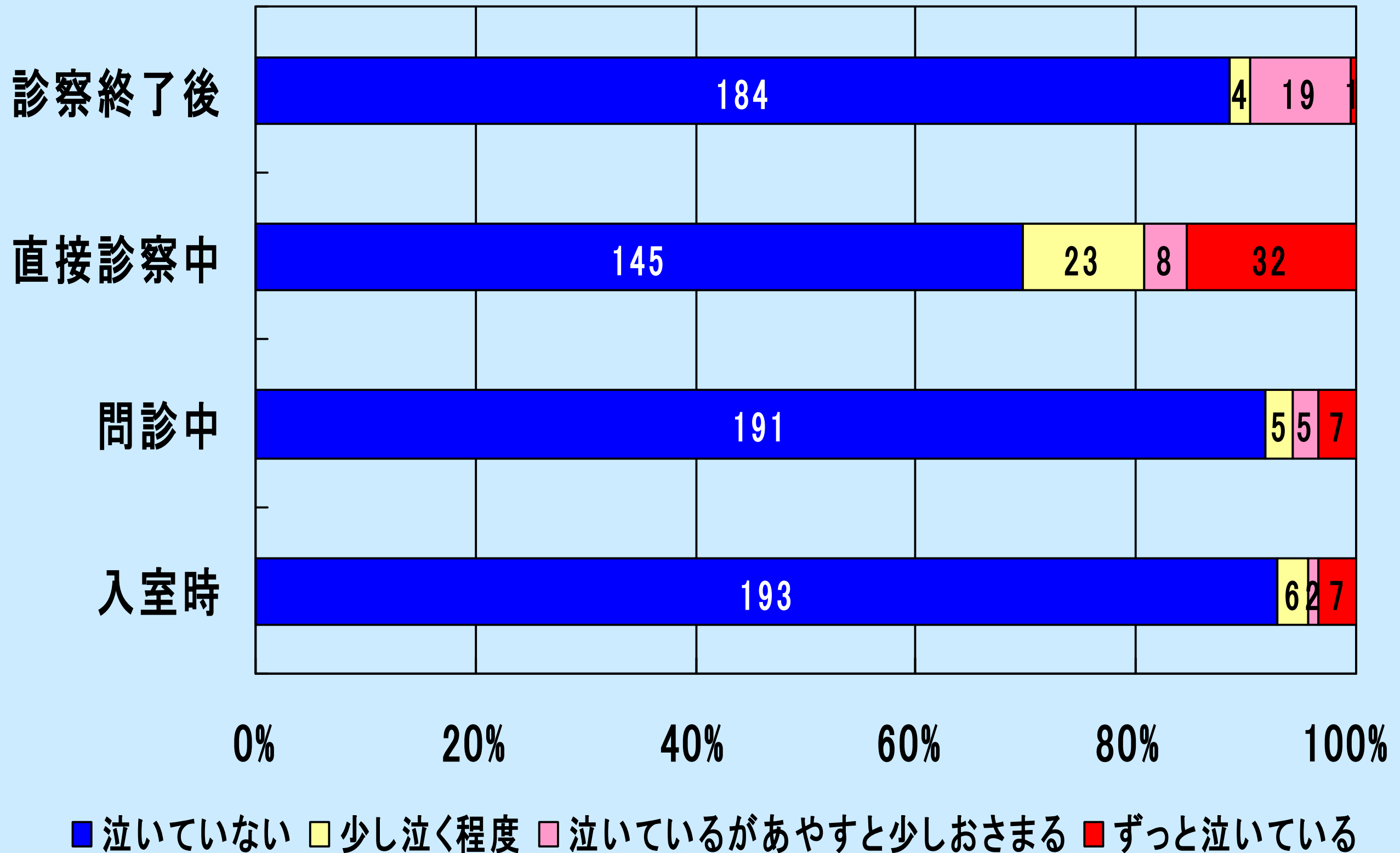




図4 問診中

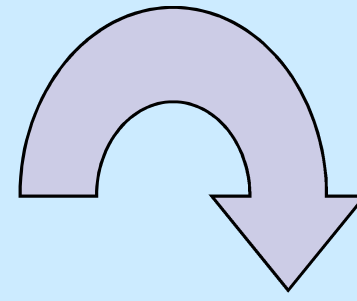
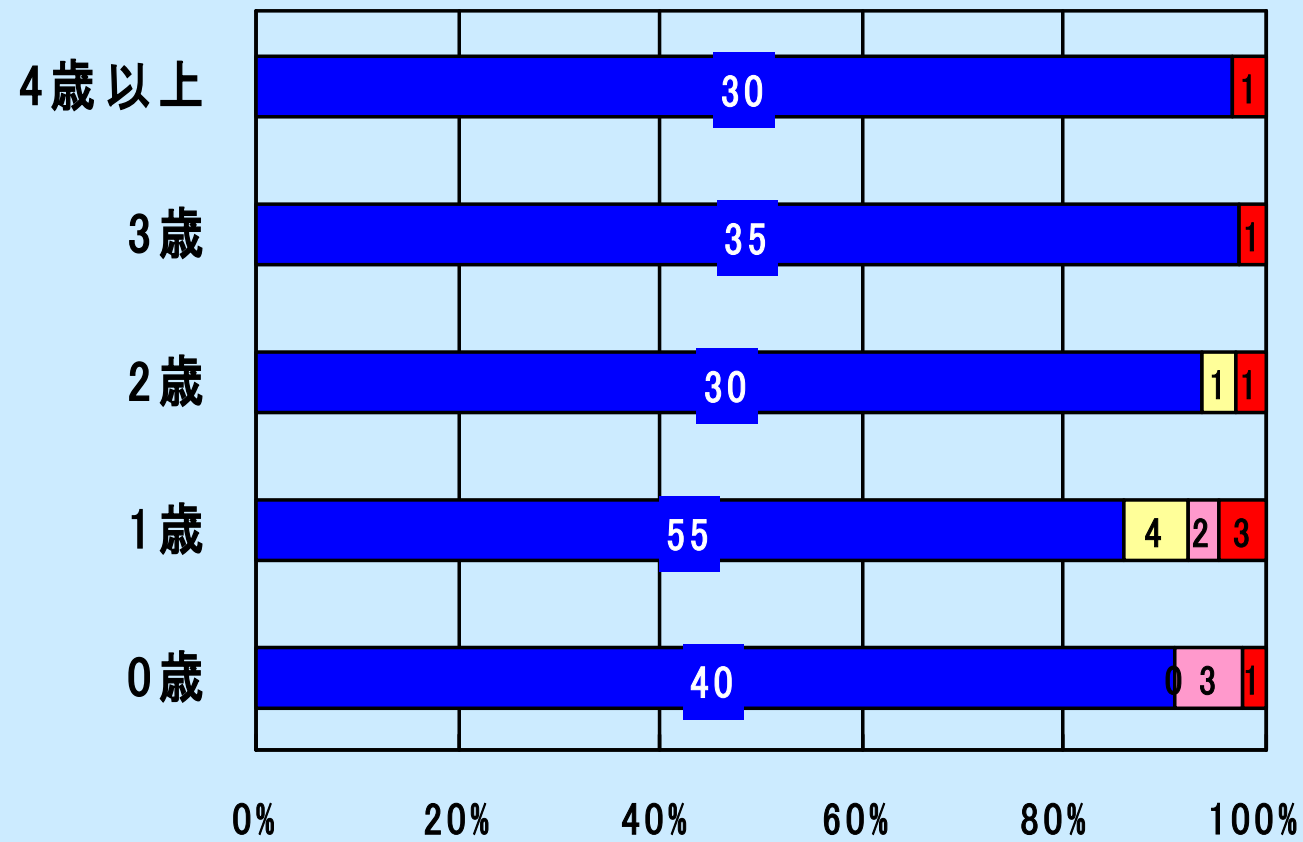


図5 直接診察中

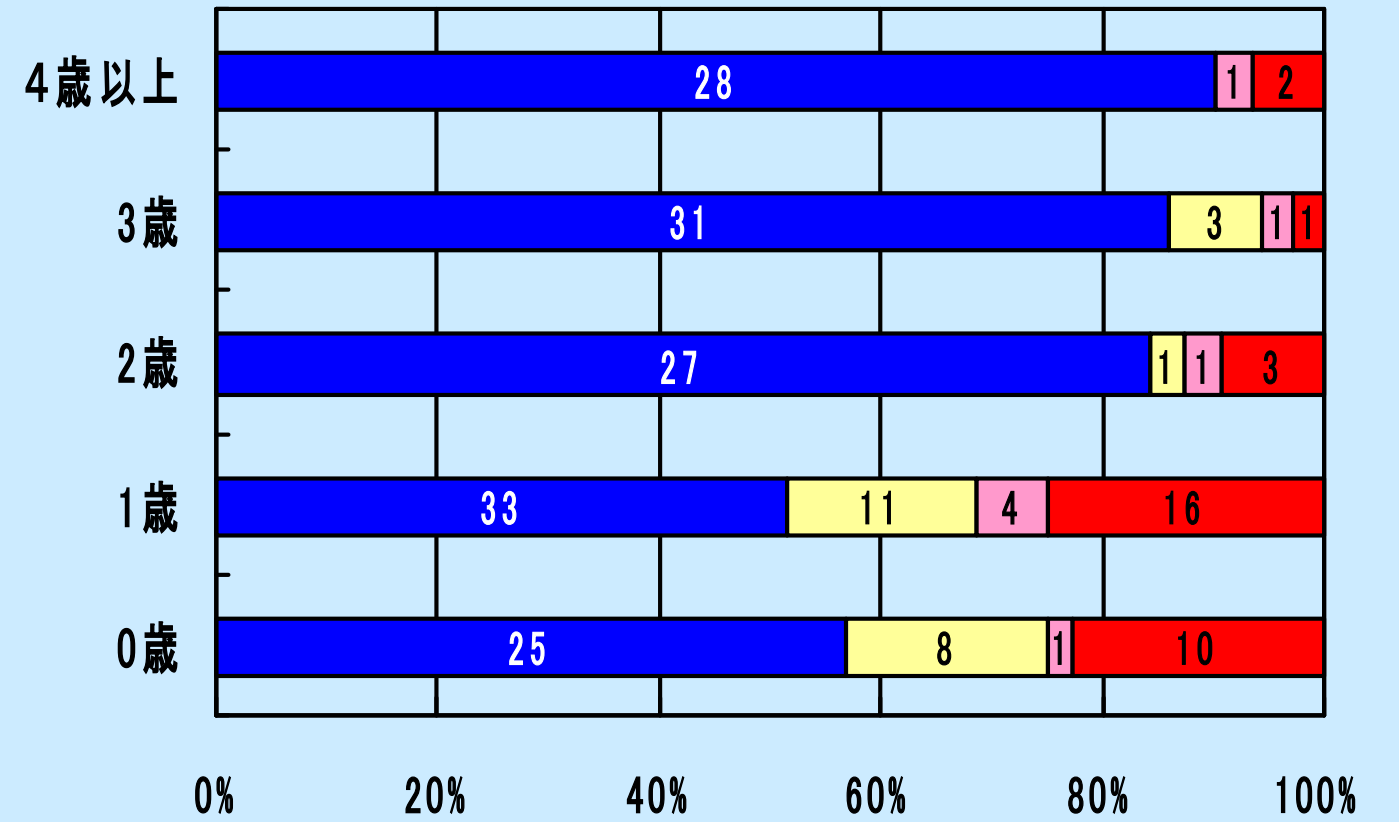
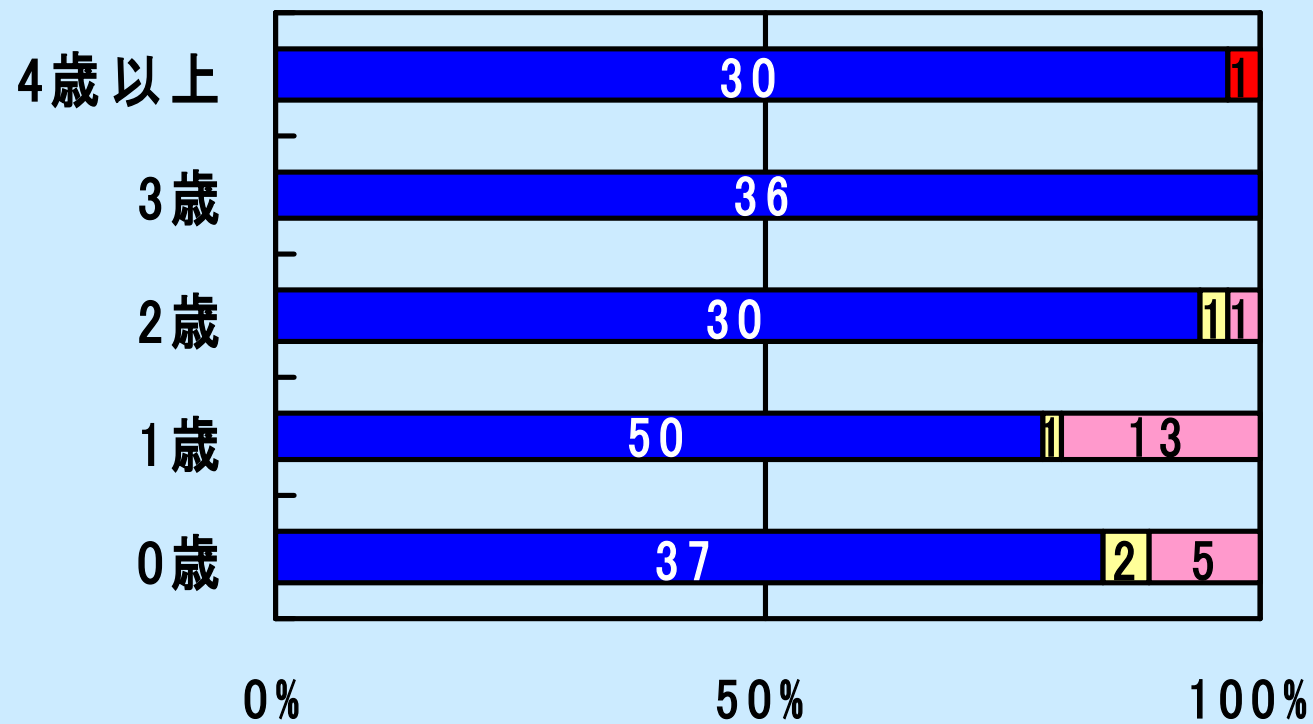
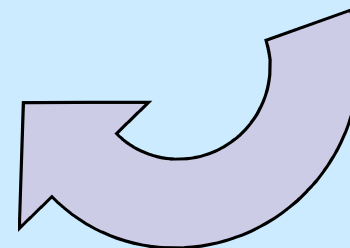


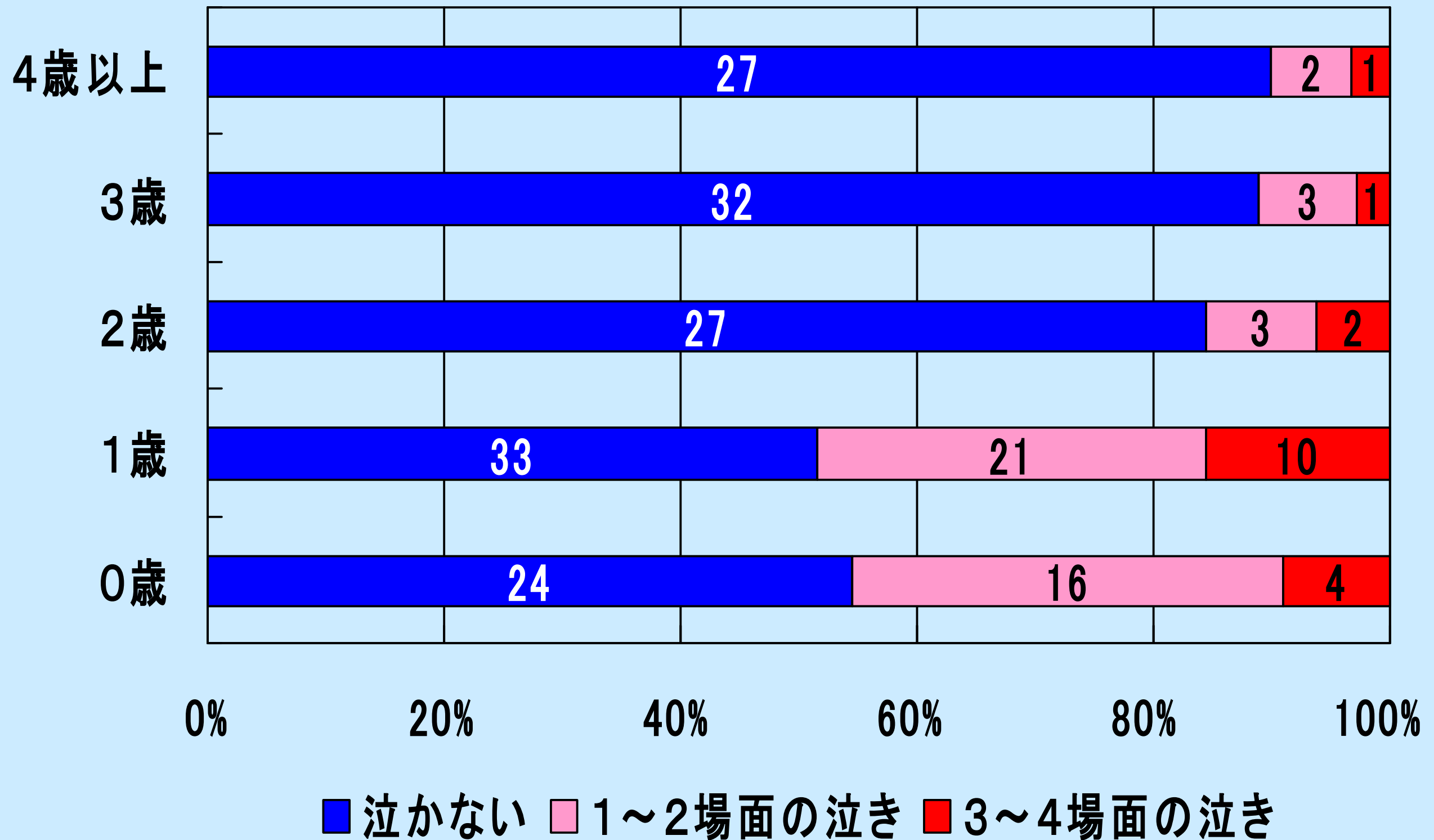
図6 診察終了時



- 泣いていない
- 少し泣く程度
- 泣いているがあやすと少しおさまる
- ずっと泣いている



# 5. 調査時の個々の小児の全場面での啼泣状況



# 調査時啼泣した乳幼児のこれまでの 啼泣状況

(3~4場面啼泣した18名)

	ほぼ毎回泣 いていた	泣く方が多い が、泣かない 時もあった	以前は泣か なかったのに、 最近泣くよう になった	計
0歳児	2		2	4
1歳児	5	2	3	10
2歳児	2			2
3歳児		1		1
4歳以上	1			1
計	10	3	5	18

## IV. 考察

- 直接診察場面以外では全く啼泣していない乳幼児が85%を占めている。これは調査した医院には以前から受診している乳幼児が多いことから、医院や医師には馴染みがあり、啼泣が少なくなっていると考えられる。
- 乳幼児の啼泣は、直接身体に触れる診察場面が多く、痛みが伴わなくても何かされるといふ不安や恐れを表している。
- 特に年齢では、1歳代以下が多く、これまでの医療者側の研究結果と一致している。

- 個々の乳幼児では、診察前後を含めて泣き続けているのは2歳以上で急激に減少している。これは2歳以上になる理解力・判断力が増し、状況判断ができるためと考えられる
- 3歳以上でもずっと啼泣している場合は、啼泣の理由や啼泣状況を観察し、必要に応じて何らかの介入をする必要があると思われる